差別とは、部落出身であることを明かせないこと ④

マイノリティに対するアイデンティティの侵害のなかで生きること

竹本昇（設置理念に則ったピースおおさかを取り戻す会　共同代表）

民族差別・部落差別は身近にあります……

◆解放教育実践者の先生から言われたこと

「大阪では解放教育をやっています」と豪語する、解放教育の実践者（Nさん）から言われた言葉です。

『旭日旗などの扇動ポスターを使ったビラ案がアジアの民衆の心を傷つける……』それはまちがいではありません。……しかし、今回はその日本の戦争を批判するためにつかうのですから」

Nさんは、このようにアジアの民衆の心を傷つけるという民族差別の論理を肯定しました。

さらに水平社宣言を持ち出され、「竹本は（部落）差別に負けている」と言われました。これは日本の社会運動の中で起こった差別事件だと思っています。

Nさんは、水平社宣言に「いたわる」ことはまちがいと記されているから、民族の心を傷つけることに反対する竹本昇は差別に負けているのだと、関係する人に文書で公表しました。差別問題を説明するときに、よく「足を踏まれた痛さは、踏んだ者にはわからない」と言われますが、Nさんは、アジアの民衆の足を踏んではいけないと言った私に対して、「部落出身者である竹本は、部落差別の痛さに負けているのだ」と言って民族差別を肯定しました。

◆「戦争」展で起こったこと

この話は、実はある市民団体が、日本の植民地支配と侵略の事実をおおくの市民に知ってもらうために開催された「戦争」展の前後に起こったことです。

私は、「戦争」展の開催を推進する実行委員会のメンバーでしたが、私の所属する二つの会の意見は、互いに対立していました。

一つの会は、この「戦争」展は「民衆運動の深化を妨げる」から「阻止・粉砕」しなければならないとして「戦争」展の進行を妨害する立場でした。もう一つは、この「戦争」展の開催を呼びかけた会でした。

私自身は、「戦争」展そのものは大事な取り組みとして開催されなければならないことだから、「阻止・粉砕」は間違っていると思いながら、しかし呼びかけた団体が被害民族のアイデンティティを侵害して差別を容認しているという矛盾の中で、二つの会の板挟みになって、どちらが正しいのかがわからなくなり、うつ病を発症させることになりました。

うつのときは新聞を読むことも憂うつ、人と会うのも憂うつ、もともと少なかった体重は7キロ減少し、朝起きるにも頭が重たくて起きることができず、夕方4時頃まで寝ることがありました。

1歳と3歳の孫が遊びにきても楽しいと思えなくなったとき、自分でも異常だと思いました。医師から中度のうつ病と診断され、連れ合いは、私のうっとうしい毎日に付き合ったために胃潰瘍を発症してしまいました。

◆問題の発端のチラシ

「戦争」展の案内用に、1937年の侵略戦争時に日本で作成された「旭日旗」の扇動画のチラシがそのまま使われようとしました。私は「民族のアイデンティティを侵害するものだ。部落出身者にしてみれば、「穢多」という差別用語をチラシにするようなものだ」と反対しました。

Nさんはじめ、実行委員会のメンバーのおおくは、このチラシに賛成でした。反対する私に対して、Nさんは「大阪では解放教育をやっています」と強い口調で言われました。このチラシは採用されませんでしたが、問題が解決したからというわけではありませんでした。

Nさんは、「戦争」展が終わってから、関係者に宛てて、長文の文書を送ってきました。そこには、水平社宣言を歪曲して被害民族の主体性を認めない差別性が記されていました。

◆「旭日旗」を使った扇動画をチラシに使うこととは……

実は、私は最初はこの扇動画をチラシにすることの問題がわかりませんでした。このチラシを見たとき、こうして戦争にいったのだと思いましたが、賛成するも反対するも、判断はできていませんでした。しかし1人の在日朝鮮人から指摘され、考えを改めました。それから、「旭日旗」を使った扇動画をチラシに使うことの意味について、ずっと考えています。

Nさんは、私の「民族のアイデンティティを侵害するものだ」という意見に大反対されました。そして実行委員会のメンバーのおおくが、Nさんの意見を受け入れました。いまの日本の社会運動を担う日本人の考え方を示しているという意味で、まずNさんの文章から、少し抜粋させてもらいます。

――「かわいそうな被害者」と言う見方自身が私は被害者を冒涜するものであると思うのです。それはいつまでも被害の部分で「泣き続け怯え続ける人」として、規定しているからです。例えば、南京の被害者、証言するひとたちはただ、「泣き続け、怯え続ける人たち」ではあきらかにないのです。その恐ろしい被害の事実のトラウマを乗り越えてて、加害者である「なかったことにしたがる日本人」に、体を張って「この苦しみをみよ!!」と告発しておられるではありませんか。この勇気の前に私たちはひれ伏すしかありません!その勇気に触発されて、心ある日本人は、「ひどい戦争をしてしまっている、末代まで謝っても済むものではない!」という思いになるのです。なさけないのですよ、日本人は。過去の時点に傷付け、またまた被害者にトラウマの苦しみをあじあわせる苦しみを与え、2度、3度と罪を犯しているのです。そしてそのとき、その被害者「かわいそうな被害者ですか?怯える被害者ですか?」。ちがうで

しょう？かれらは目覚められない日本人を教戒する気高い使徒であり、教師であるのですよ。

「慰安婦」問題もおなじことがいえると思っています。――

◆Ｎさんの心の傷の意味の履き違えについて

被害者が加害者に対して、自己の被害体験を証言することは精神的苦痛を伴いますが、このときの心の傷と、加害者が被害者の尊厳を冒すことによって与える心の傷は意味が異なると思います。

前者は、日本の非人道行為を告白する被害者側の主体性の問題であり、後者は、被害者の感情を尊重しようとしない加害者側の責任の問題です。「旭日旗」の下で被害を受けた被害民族当事者の思いを受け止めず、心を傷つけることを承知しながら、人集めのためのチラシを作成することは、後者に属する行為です。これらは主体性と責任の帰属が異なる別の話です。

被害者が「『泣き続け、怯え続ける人たち』ではあきらかにないのです」のは事実だと思いますが、それを理由にして、植民地支配と侵略戦争の歴史的加害責任を有する加害者が、被害者に対して心を傷つけていいということにはなりません。

日本人である加害責任を自覚し反省する立場の者が、被害当事者に対して、被害の事実を告白したことを勇気があると賞賛することは、自分で足を踏んでおきながら、踏まれた人が痛いと抗議していることを勇気があると賞賛するようなもので、被害者を蔑ろにするものです。

被害者の想いを、都合よく勝手に歪曲して民族の尊厳を冒すことを正当化してはなりません。「旭日旗」の下で蹂躙された被害者の「旭日旗」に対する感情を無視して歪曲してはならないと思います。

◆「旭日旗」・「日章旗」への反応

■日本軍の性奴隷制度に被害者である金学順さんは、証言のために訪日したとき、ＪＡＬの尾翼マークを見て、日章旗を思い出し、足がすくんだと証言されています。

■アメリカ州立の学校では、「旭日旗」に似た模様の壁画が描かれたことに対して、在米コリアンが「憎悪を煽る自由はない」として壁画の撤回を求めて裁判を起こしました。

■日本の海上自衛隊が国際観艦式で旭日旗を掲揚する立場を表明したとき、日本軍性奴隷の被害者の金福童（キム・ボクドン）さんは、「日本政府は謝罪すべきだ。安倍（首相）にはっきりと伝えろ。（旭日旗）持って入ってくることはできないと。注意しろと伝えてほしい」と言って海上自衛隊の旭日旗掲揚を批判しました。

そして、このとき、韓国外交部から外交経路を通じて日本側に「旭日旗に対する韓国国民の情緒を積極的に考慮してほしい」と伝えられました。

■韓国でアニメ「鬼滅の刃」が、主人公のイヤリングが「旭日旗」に似ているため、図柄を変えて上映されています。

以上のように、同じ「旭日旗（もしくは日章旗）」であっても、被害の歴史体験をした人たちと加害側の歴史に無知な者とでは、見える風景が違います。「旭日旗」に対する歴史認識は、加害と被害の立場では異なります。この違いを認めず、「旭日旗」の下で蹂躙された被害民族の主体を無視して、日本人の自民族中心の論理で当てはめ

『部落解放』（58号　1974年8月）
1974年5月の事件。
竹本さんは1970年6月に大阪中央郵便局に就職し、
半年後に辞めている。

ることは暴力です。これが民族のアイデンティティの侵害です。

「戦争」展の開催の目的は、「嫌韓・嫌中」と「北朝鮮バッシング」が、政府とマスメディアから、洪水のように宣伝され、アジアの民衆の心を傷つけ続けている暴力を根絶するためのものです。

「戦争」展は、日本が植民地支配と侵略戦争に対して謝罪と反省と賠償を成し得ていない現在、被害国と被害民族の心を傷つけることを継続して拡大しているから、それをやめることを社会に訴えるために開催されるはずのものです。

日本の植民地と侵略の加害の事実を知るための展示は、戦争賛美のためでないことはもちろんのこと、民族の尊厳を冒涜するためのものでもなければ、民族の心を傷つけるためのものでもありません。日本人が加害民族として歴史を知り、民族のアイデンティの侵害の状況を知り、その責任を自覚して反省して、二度と同じことを繰り返さず、被害民族からの信頼を取り戻すための取り組みです。この観点を忘れない加害展示は、被害者の心を傷つけることにはならないと思います。

◆差別された側は……考えつづける日々

「解放教育」の実践者のNさんに、「竹本は（部落）差別に負けている」・「怒り出しますよ、みんな!!」と言われたこと、あれから4年がたちますが、部落出身者として生きてきた私の半生も重ね合わせ、何が正しいのかと考え続ける日々でした。

自分の考えに自信が持てず不安や孤立感に苛まれている最中、意見を異にする人からの集団的無視は精神的に堪えました。その間、「差別の核は、アイデンティティの侵害だ」と私に教えてくれた在日朝鮮人の親友との死別にもあいました。

差別をなくすために差別の事実を知ってもらう展示会が必要です。

江戸時代の道後温泉では、部落の人間は、牛や馬といっしょに屋外の池のような湯にしか入れなかったという差別を示す絵図があります。

こんな絵が、展示会案内のチラシにされたら、部落の側はたまったものではありません。部落の心を傷つける絵を人前に提示するというのは、観る人が、部落の人のアイデンティティを理解し尊重し、今後、部落の人と一緒になって差別をなくそうという気持ちになれる条件下において展示物として提示されるべきであって、不特定者を対象とするチラシにすることは部落の人の尊厳を冒す行為と考えています。

（つづく）

（たけもと　のぼる）